源信和尚と親鸞聖人

林　智康

はじめに

浄土真宗の開祖親鸞聖人は比叡山において二十年間、天台教学を中心に学問修行に励まれたのであるが、また浄土教思想の影響もかなり受けられたと思われる。ここでは日本天台宗の恵心僧都源信和尚の著『往生要集』を中心に、源信の教学と親鸞の著述・思想と、どのように関わりがあるのかを考察したい。

源信は比叡山横川の恵心院に住したので、恵心僧都ともいわれる。天慶五年（九四二）大和国（奈良県）葛木下郡当麻郷の生まれで、父は占部正親、母は清原氏出身である。天暦四年（九五〇）九歳のとき、比叡山に登って出家し、天台宗中興の良源に師事し、天慶八年（九五四）十三歳のときに得度受戒する。後に母の訓戒によって横川に隠棲した。(1)

『往生要集』の第十問答料簡の後にある跋には、

永観二年甲申冬十一月、天台山延暦寺首楞厳院にして、この文を撰集す。明くる年の夏四月に、その功を畢ふ。一の僧ありて夢みらく、毘沙門天、両の小童を将て、来り告げていはく、「源信が撰せるところの『往生集』

は、みなこれ経論の文なり。一見・一聞の倫は、無上菩提を証すべし。すべからくして一偈を加へて、広く流布せしむべし」と。他日に夢を語る。ゆゑに偈を作りていはく、

すでに聖教および正理によりて、
衆生を勧進して極楽に生ぜしむ。
乃至展転して一たびも聞くもの、
願はくはともにすみやかに無上覚を証せん。（原漢文『真聖全』一・九二五頁、『七祖註釈版』一一七九頁）

と記されている。永観二年の冬十一月に、天台山延暦寺の首楞厳院で諸文を撰び集め、翌年夏四月にその作業を終えたのである。ある僧が夢の中で毘沙門天が髪をあげまきに結った二人の童子を連れて「源信が撰んだ『往生要集』はみな経論の文であり、一度見たり聞いた人は無上菩提を証ることができる。ぜひとも一偈を加えて、広く流布させるがよい」と告げられたという。他日その僧が私（源信）にその夢を語った。そのために偈を作って次のごとく述べる。「すでに聖教と正理によって　人々に勧めて極楽に生まれさせる　めぐりめぐって一たびでも聞く者は　願わくは共に速やかに無上仏果を証りたいものである」

源信は永観二年（九八四）十一月から翌寛和元年（九八五）四月、四十三歳から四十四歳まで、わずか半年間で『往生要集』三巻を書き終えている。この半年間の執筆に対して疑問視する説もある。[2]『往生要集』には九百五十二文の経論疏の引文があり、その引用文は多岐にわたり、『大正新脩大蔵経』前半の全五十五巻の中、三分の二以上の四十巻にわたっているといわれる。[3]

寛仁二年（一〇一七）六月二日に源信は食物を受けつけなくなり、同月九日には阿弥陀仏の手に結んだ糸を握って、『十二礼』に偈文などを唱えた。そして翌十日の朝、仏の手につないだ糸を執って安らかに往生したと『首楞

厳院二十五三昧結縁過去帳』に伝える。[4] 七十六歳であった。

一、源信の『往生要集』

源信の著述は、諸目録によると百六十点にもおよび、『恵心僧都全集』全五巻には八十五部収録されている。また源信の真撰として十七部が認められている。

『往生要集』巻上の序に、

それ往生極楽の教行は、濁世末代の目足なり。道俗貴賤、たれか帰せざるものあらん。ただし顕密の教法、その文、一にあらず。事理の業因、その行これ多し。利智精進の人は、いまだ難しとなさず。予がごとき頑魯のもの、あにあへてせんや。このゆゑに、念仏の一門によりて、いささか経論の要文を集む。これを披きこれを修するに、覚りやすく行じやすし。総べて十門あり。（『真聖全』一・七二九頁、『七祖註釈版』七九七頁）

と述べる。すなわち往生極楽の教行は五濁悪世、末法の時代の生きるよりどころとなるものである。顕教・密教、事観・理観と諸行は多い。利智精進の人は難しくないが、私（源信）のようなかたくなで愚かなものはどうしてできようか。したがって念仏一つの教えによって経論の要文を集めた。これを見て実践すれば覚りやすく行じやすい。全部で十門ある。このように述べている。源信自身「予がごとき頑魯のもの」と述べて、念仏の教えをよりどころとしていることが解る。次に十門を述べると、左記のごとくに示されている。[5]

（一）厭離穢土―六道輪廻の穢土を厭う、（二）欣求浄土―十楽によって極楽を欣う、（三）極楽証拠―極楽は十方浄土や兜率天より勝れている、（四）正修念仏―五念門を通して念仏の実践方法を説く、（五）助念方法―念仏を助成する七項目を述べる、（六）別時念仏―日時を限定した尋常の別行と臨終念仏の行儀を説く、（七）念仏利益―念

仏の利益を述べる、（八）念仏証拠―念仏によって往生を得る証拠十文、（九）往生諸行―念仏以外の諸行による往生を述べる、（十）問答料簡―上述に関連する諸問題を問答形式で解釈する。

大文第一厭離穢土―（1）地獄道（①等活地獄・②黒縄地獄・③衆合地獄・④叫喚地獄・⑤大叫喚地獄・⑥焦熱地獄・⑦大焦熱地獄・⑧阿鼻地獄）・（2）餓鬼道・（3）畜生道・（4）阿修羅道・（5）人道・（6）天道・（7）総結厭相

大文第二欣求浄土―（1）聖衆来迎楽・（2）蓮華初開楽・（3）身相神通楽・（4）五妙境界楽・（5）快楽無退楽・（6）引接結縁楽・（7）聖衆倶会楽・（8）見仏聞法楽・（9）随心供仏楽・（10）増進仏道楽

大文第三極楽証拠―（1）対十方・（2）対兜率

大文第四正修念仏―（1）礼拝門・（2）讃嘆門・（3）作願門・（4）観察門（①別相観・②総相観・③雑略観）・（5）回向門

大文第五助念方法―（1）方処供具・（2）修行相貌・（3）対治懈怠・（4）止悪修善・（5）懺悔衆罪・（6）対治魔事・（7）総結要行

大文第六別時念仏―（1）尋常別行・（2）臨終行儀

大文第七念仏利益―（1）滅罪生善・（2）冥得護持・（3）現身見仏・（4）当来勝利・（5）弥陀別益・（6）引例勧信・（7）悪趣利益

大文第八念仏証拠

大文第九往生諸行―（1）明諸経・（2）総結諸業

大文第十問答料簡―(1)極楽依正・(2)往生階位・(3)往生多少・(4)尋常念相・(5)臨終念相・(6)麁心妙果・(7)諸行勝劣・(8)信毀因縁・(9)助道資縁・(10)助道人法

『往生要集』は十門から成り立っている。大文第一厭離穢土・大文第二欣求浄土・大文第三極楽証拠の三門は、次の大文第四正修念仏門の前方便の位にあたる。この正修念仏門は天親の『浄土論』にある五念門を受けて、浄土往生の因として観察門中心の五念門行を述べている。

大文第四に、正修念仏といふは、これにまた五あり。世親菩薩の『往生論』にいふがごとし。「五念門を修して行成就しぬれば、畢竟じて安楽国土に生れて、かの阿弥陀仏を見たてまつることを得。一には礼拝門、二には讃嘆門、三には作願門、四には観察門、五には回向門なり」と。

（『真聖全』一・七八〇頁、『七祖註釈版』八九七頁）

そして、初めの礼拝門において、三業相応の身業で、一心に帰命して五体投地を行い西方の阿弥陀仏を礼拝すると述べ、『観仏三昧経』・『法華常行三昧礼仏文』（慈覚大師円仁著）・『心地観経』を引文している。この『心地観経』には六種の功徳を述べており、親鸞の『教行信証』行巻にも引用されている。

讃嘆門は三業相応の口業で阿弥陀仏の徳を広く讃えている。龍樹の『十住毘婆沙論』「易行品」弥陀章の文を詳しく引いている。そしてこの後に『浄土論』の偈・「真言教の仏讃」・『法華経』の偈の名を挙げている。

作願門は三業相応の意業である。『浄土論』の作願門は奢摩他の定心行法であるが、『往生要集』では道綽の『安楽集』巻上「第二大門」第一菩提心義を引いて菩提心としている。『安楽集』の中に『大経』と『往生論註』を引文して、浄土往生の源は菩提心であり、願作仏心・度衆生心の菩提心を発することを勧めている。そして菩提心は

浄土菩提の綱要であると述べ、続いて(一)菩提心の行相、(二)利益、(三)料簡を述べる。

最初の菩提心の行相については、『摩訶止観』の菩提心の解釈による縁事・縁理の四弘誓願について詳細に述べている。縁事の四弘誓願について図示すると左記のごとくである。(6)

(四弘誓願)	(三聚戒)	(三徳)	(三因)	(三身因)
① 衆生無辺誓願度	饒益有情戒(摂衆生戒)	恩徳	縁因仏性	応身因
② 煩悩無辺誓願断	摂律儀戒	断徳	正因仏性	法身因
③ 法門無尽誓願知	摂善法戒	智徳	了因仏性	報身因
④ 無上菩提誓願証	三身円満菩提(自利)	広度一切衆生(利他)		果

(『真聖全』一・七八三頁、『七祖註釈版』九〇三―九〇四頁)

縁事とは具体的な事相を縁とすることであり、縁理とは普遍的な真理を縁とすることである。縁事の四弘誓願は三縁中衆生縁・法縁の慈悲にあたり、縁理の四弘誓願は無縁の慈悲にあたる。

三縁とは衆生縁・法縁・無縁の慈悲で、凡夫の慈悲を小悲、声聞・縁覚・菩薩の慈悲を中悲、仏の慈悲を大悲という。縁因仏性は智慧をおこす縁となる、すべての善根功徳をいい、正因仏性はすべての存在に本来そなわっている真如の理をいい、了因仏性は真如の理を照らしあわす智慧をいう。天台宗では縁因仏性・正因仏性・了因仏性の三因仏性説を立てる。三聚戒は三聚浄戒、三種戒蔵といい、饒益有情戒(摂衆生戒)は一切の衆生をことごとく摂取して、あまねく利益を施すことであり、摂律儀戒は一切の諸悪をみな断じて捨て去ること。さらに摂善法戒は積

極的に一切の諸善を実行する意味である。

『摩訶止観』第七正修章十乗観法の十乗広解中第二起慈悲心に「真正菩提心を発すは」と標して四弘誓願を出している。すなわち「大悲を起して両誓願を興す、衆生無辺誓願度、煩悩無数誓願断、大慈悲を起して両誓願を興す、法門無量誓願知　無上仏道誓願成」とあり、この意を受けて縁事の四弘誓願が述べられている。

また縁理の四弘誓願については、

> 縁理の願とは、一切の諸法は、本来寂静なり。有にあらず無にあらず、常にあらず断にあらず、生ぜず滅せず、垢れず浄からず。一色・一香も、中道にあらずといふことなし。生死即涅槃、煩悩即菩提なり。（中略）衆生、この不思議・不縛の法のなかにおいて、しかも思想して縛をなし、無脱の法のなかにおいて、しかも脱を求む。このゆゑにあまねく法界の一切衆生において、大慈悲を起し、四弘誓を興す。これを順理の発心と名づく。これ最上の菩提心なり。『止観』の第一を見るべし。
>
> （『真聖全』一・七八三―七八四頁、『七祖註釈版』九〇四―九〇五頁）

と、普遍的な真理と合致する菩提心が最上の菩提心と述べており、『摩訶止観』の第一を見よと述べている。続いて後に、

> この二の四弘におのおの二の義あり。一にはいはく、初めの二の願は衆生の苦・集二諦の苦を抜く。後の二の願は衆生に道・滅二諦の楽を与ふ。二にはいはく、初めの一は他に約す。後の三は自に約す。いはく、衆生の二諦の苦を抜き、衆生に二諦の楽を与ふることは、総じて初めの願のなかにあり。この願を究竟円満せんと欲ふがために、さらに自身に約して後の三の願を発す。（『真聖全』一・七八四頁、『七祖註釈版』九〇五―九〇六頁）

と、四弘誓願の初めの二願には四聖諦の苦諦・集諦の苦を除き、後の二願には滅諦・道諦の楽を与える意があり、

また最初の願は利他を、後の三願は自利を述べている。

さらに作願門の「第二利益を明かす」ところでは、「問ふ。縁事の誓願もまた勝利ありや。答ふ。縁理にしかずといへども、これまた勝利あり」（『真聖全』一・七九三頁、『七祖註釈版』九二五頁）と言って、五由をあげて縁事にも勝利があると述べている。

続いて第四の観察門の冒頭に、

第四に観察門とは、初心の観行は深奥に堪へず。『十住毘婆沙』にいふがごとし。「新発意の菩薩は先づ仏の色相を念ず」と。また諸経のなかに、初心の人のためには、多く相好の功徳を説けり。このゆゑにいままさに色相の観を修すべし。これを分ちて三となす。一には別相観、二には総相観、三には雑略観なり。意楽に随ひてこれを用ゐるべし。（『真聖全』一・七九八頁、『七祖註釈版』九三四頁）

と、初心者には色相観（事観）を述べ、この色相観に別相観・総相観・雑略観を示す。

第一の別相観は阿弥陀仏の座である蓮台を観じる華座観と、阿弥陀仏の姿を観じる真身観の二観に分けられる。そして、まず華座観を初めに修し、続いて真身観を修するように述べている。これは「かくのごとき妙華は、これ本法蔵比丘の願力の所成なり。もしかの仏を念ぜんと欲ふものは、まさに先づこの華座の想をなすべし」（『真聖全』一・七九九頁、『七祖註釈版』九三五頁）と述べていることからも解る。また「以上、この座の相を観ずるものは、五万劫の生死の罪を滅除して、必定してまさに極楽世界に生るべし」（『真聖全』一・七九九頁、『七祖註釈版』九三六頁）と、華座を観じるだけでも必ず極楽に生まれると述べる。

次に真身観については、「次にまさしく相好を観ず。いはく、阿弥陀仏は華台の上に坐して、相好炳然として、その身を荘厳したまへり」（『真聖全』一・七九九頁、『七祖註釈版』九三六頁）と述べ、阿弥陀仏の相好を四十二種出

して解説していくのである。また「順観の次第は、大途かくのごとし。逆観は、これに反して、足より頂に至る」（『真聖全』一・八〇六頁、『七祖註釈版』九五二頁）と、頭から足の順に観察するものを順観といい、逆に足から頭へ観察するものを逆観と述べる。さらに、

一事より起してまた一事を想ひ、一事を想ひをはればまた一事を想へ。逆順反覆すること、十六反を経よ。かくのごとくして、心想きはめて明利ならしめ、しかして後に、心を住めて念を一処に繋けよ。（中略）二七日を経て、しかして後に、身心安穏なることを得べし」と。導和尚のいはく、「十六遍の後には、心を住めて白毫相を観ぜよ。雑乱することを得ざれ」と。（『真聖全』一・八〇六頁、『七祖註釈版』九五二―九五三頁）

と、順観・逆観を十六反繰り返し、心を一箇所にとどめて禅定の姿勢で十四日間行ずれば、身心とも安穏となると述べる。本文の「十六反の順逆観」や「心を一箇所にとどめる」の内容は、善導の『観念法門』を引いて、白毫相にも言及している。

第二の総相観は阿弥陀仏の全身を一度に観ずることである。ここでは仏身の相好光明を観ずる事観についてと、法身・報身・応身の三身が即一身である真如実相が、そのまま阿弥陀仏の相好光明であるという理観について述べている。前者は『観念法門』、後者は『摩訶止観』の影響を受けている。

第三の雑略観については、「三に雑略観とは、かの仏の眉間に一の白毫あり」（『真聖全』一・八〇九頁、『七祖註釈版』九五六頁）と、別相観・総相観が難しいものには種々の相好を略して眉間にある白色の旋毛のみを観想する白毫相を勧める。すなわち阿弥陀仏の白毫の中には八万四千の好があり、その好より八万四千の光明があって、種々の宝の色光を放っているのである。そして、

またかの一々の光明、あまねく十方世界の念仏の衆生を照らして、摂取して捨てたまはず。われまたかの摂取

のなかにあれども、煩悩、眼を障へて、見たてまつることあたはずといへども、大悲倦むことなくして、つねにわが身を照らしたまふ。（『真聖全』一・八〇九頁、『七祖註釈版』九五六―九五七頁）

と、前半にその光明は遍く十方世界を照らし、念仏の衆生を摂取して捨てないと、『観経』真身観の文を出し、続けて後半に源信自らが、煩悩によって光明を見ることができないが、大悲は常に照らしてくれると述べている。

続いて源信は、きわめて簡略な観想である極略観を出している。すなわち、

もし極略を楽ふものは、念ふべし。かの仏の眉間の白毫の相は、旋転せること、なほ頗梨珠のごとし。光明あまねく照らしてわれらを摂めたまふ。願はくは、衆生とともにかの国に生れんと。もし相好を観念するに堪へざることあらば、あるいは帰命の想により、あるいは引摂の想により、あるいは往生の想によりて、一心に称念すべし。以上、意楽不同なり。ゆゑに種々の観を明かす。行住坐臥、語黙作々に、つねにこの念をもつて胸のなかに在くこと、飢して食を念ふがごとくし、渇して水を追ふがごとくせよ。あるいは頭を低れ手を挙げ、あるいは声を挙げて名を称せよ。外儀は異なりといへども、心念はつねに存ぜよ。念々に相続して、寤寐に忘るることなかれ。（『真聖全』一・八〇九頁、『七祖註釈版』九五七―九五八頁）

と、眉間の白毫相は水晶の玉のように渦巻状にまわっており、その光明は普く照らして我々を摂取してくれる。したがって衆生とともに浄土に生まれたいと願うと述べる。しかし、さらに相好を観念することができなければ、帰命想・引摂想・往生想のいずれかによって、一心に称念せよと述べている。すなわち観念に堪えられないものには、三想一心の称念が示されている。そしてその一心称念は行・住・坐・臥・語・黙の六作において、外儀は異なっても、念々相続されなければならないと述べている。

次に大文第五の助念方法は、前の第四正修念仏に説かれる五念門に対する助業が説かれる。初めに、

大文第五に、助念方法といふは、一目の羅は鳥を得ることあたはず、万術をもつて観念を助けて、往生の大事を成ず。いま七事をもつて、略して方法を示さん。一には方処供具、二には修行相貌、三には対治懈怠、四には止悪修善、五には懺悔衆罪、六には対治魔事、七には総結要行なり。

（『真聖全』一・八一四頁、『七祖註釈版』九六六頁）

「観念を助けて往生の大事を成す」とは、五念門の中心である観察門の念仏を助けて往生の大事を成すのである。その助業として七事が説かれている。その中の第二修行相貌に三心と四修が説かれる。いわゆる安心と作業が念仏の助業である。『往生礼讃』には、安心（三心）・起行（五念門）・作業（四修）が説かれている。

第二の修行相貌は『摂論』等（『摂大乗論』や『倶舎論』）によって四修の相を用いよ、と述べているが、実際は『西方要決』や善導の『往生礼讃』の文を引いている。一に長時修、二に慇重修、三に無間修、四に無余修は、すべて善導の文である。

また三心についても、師の慈恵大師良源の『九品往生義』の三心を引かず、善導の『往生礼讃』を引いている。上述の往生の行軌である安心・起行・作業をさらに具体的に展開したのが、最後の総結要行である。

第七に総結要行とは、問ふ、上の諸門のなかに陳ぶるところすでに多し。いまだ知らず、いづれの業をか往生の要となす。答ふ。大菩提心と、三業を護ると、深く信じ、誠を至して、常に仏を念ずとは、願に随ひて決定して極楽に生ず。いはんやまた、余のもろもろの妙行を具せらんをや。

問ふ。なんがゆゑぞ、これらを往生の要となす。答ふ。菩提心の義は、前につぶさに釈するがごとし。三業の重悪はよく正道を障ふ。ゆゑにすべからくこれを護るべし。往生の業は念仏を本となす。

（『真聖全』一・八四七頁、『七祖註釈版』一〇三〇頁）

と、往生行として七法、すなわち（一）菩提心、（二）護三業、（三）深信、（四）至誠、（五）常、（六）念仏、（七）随願である。

三、法然聖人と『往生要集』

法然の思想過程として、石井教道氏は（一）浅劣念仏期・要集浄土教時代、（二）本願念仏期・善導念仏時代、（三）選択念仏期の三期、[7]同じく大橋俊雄氏は（一）天台的浄土教思想受容期、（二）浄土教思想確立期、（三）選択本願念仏思想確立期の三期[8]としている。一般的には、第一期は承安五年（一一七五）四十三歳までに『往生要集』に関する注釈書を、第二期は文治六年（一一九〇）五十八歳頃に「浄土三部経」に関する注釈書を、そして第三期は建久九年（一一九六）六十六歳に『選択集』をそれぞれ著されたとされる。しかし福原隆善氏は（二）浄土三部経講説期、（三）『選択集』講説期の三期に分けているが、『往生要集』は四十三歳以後、あまり遠くない時期に制せられたとしている。[9]赤松俊秀氏も『往生要集』に関する注釈書は比較的後期に属すると述べている。[10]

『往生要集』に関する注釈は『往生要集釈』（『往生要集大綱』）・『往生要集略料簡』・『往生要集料簡』・『往生要集詮要』の四釈がある。

『往生要集釈』の冒頭に、

> まさにこの集を釈せむとするに、経論を釈するに准ぜば、三門あるべし。一には大意、二には釈名、三には入文解釈なり。
>
> （『真聖全』四・三九二頁）

と、三門に分け、それぞれ解釈している。第一の大意は念仏を修めて往生を求願する、第二の釈名は三つに分け、まず往生は死後、西方極楽世界に生まれること、要は浄土に往生するためには、念仏を要として諸行を要としない、

集は広く経論によって念仏往生の文を撰集する。第三の入文解釈には二あり、一つには三段の分別、二つには章門の開合である。三段は序分・正宗分・流通分である。章門の開合とは開は『往生要集』第一の厭離穢土門から第十の問答料簡門、合はまず第一厭離穢土門、次の第二欣求浄土門に第三極楽証拠門を入れ、続いて第四正修念仏門に第五助念方法門、第六別時念仏門、第七念仏利益門、第八念仏証拠門の四門を摂め、そして第九往生諸業門を第四門、第十問答料簡門を第五門とする。第一厭離穢土門と第二欣求浄土門を合わせて修行の方便とし、第三正修念仏門、第四往生諸行門、第五問答料簡門を往生の業因としている。図示すれば左記のごとくである。

章門開合

開（十門）

1．厭離穢土門
2．欣求浄土門
3．極楽証拠門
4．正修念仏門
5．助念方法門
6．別時念仏門
7．念仏利益門
8．念仏証拠門
9．往生諸業門
10．問答料簡門

合（五門）

1．厭離穢土門
2．欣求浄土門
3．正修念仏門
4．往生諸行門
5．問答料簡門

修行の方便
往生の業因

また法然は『往生要集』を広・略・要の三例に分け、広は本集一部三巻を序・正・流の三分により、十門会文について逐次解説している。略は第五助念方法門の第七総結要行中に示す七法によって『往生要集』の中心とする。図示すれば左記のごとくである。

（『真聖全』一・八四七頁、『七祖註釈版』一〇三〇―一〇三一頁）

七法

1．大菩提心――第四正修念仏門　作願門
2．護三業――第五助念方法門　止悪
3．深信――第五助念方法門　修行相貌三心
4．至誠――第五助念方法門　修行相貌三心
5．常――第五助念方法門　四修無間修
6．念仏――第四正修念仏門　観察門
7．随願――第五助念方法門　修行相貌三心

七法は浄土に往生せんとするものは、縁事の大菩提心を発し、持戒によって三業の悪を止め、三心の信によって無間に念仏すべきことを教えたものである。

要は念仏一行を勧進する。第四正修念仏門には天親の五念門が引かれる。礼拝・讃嘆・作願・観察・回向の中、観察門が要であって、観念は勝・難であり、称念は劣・易とする。そして、行者の意業にまかせ、根機にしたがって、無間に修すべきことを勧進している。観察門には三想一心称名が述べられる。すなわち別相観・総相観・雑略観を示し、もし相好を観念するに堪えざるものは、帰命想・引摂（接）想・往生想によって一心に称名念仏すべき

ことを勧めている。（『真聖全』四・四〇一―四〇二頁参照）

第八念仏証拠門には三問答六義相対について述べている。念仏の易行なることを説き、経証をあげて念仏の勧進多きことを示し、さらに問答により、念仏は専ら往生のために選び説かれたものにして、弥陀の自説であり、仏光が諸行を摂取せずして、念仏を摂取することを示し、『大乗起信論』を引用して、諸経論が多く念仏をもって往生の要となしていることを明示している。そして法然は私釈において第三問答のところに、

如来の随機と四依の理尽となり。謂はく諸行は釈迦如来、衆生の機に随ってこれを説きたまふ。念仏は四依の菩薩、理を尽くしてこれを勧めたまふと云々。これ則ちこの集の本意なり。委しくこれを思うべし。

（『真聖全』四・四〇四頁）

と、釈迦如来は機に随って諸行を説き、念仏は四依の菩薩が理を尽くして勧められる。これは『往生要集』の本意であるから委しく考えよと述べている。

第十問答料簡門の第二往生階位に道綽・善導の二師の書を述べている。

然れば則ち恵心を用ゐるの輩は必ず善導・道綽に帰すべし。これによって先づ綽禅師の『安楽集』を披いて、これを覧て聖道・浄土二門の仏教を分つの釈これを見よ。次に善導『観経の疏』これを見るべし。

（『真聖全』四・四〇五頁）

法然が『往生要集』を重視したことについては、（一）対外的態度と（二）対内的態度がみられる。（一）対外的態度として、『浄土文初学抄』に『往生要集』極楽証拠門の対十方にある浄土に対し極楽を願う文として天台大師智顗『十疑論』を挙げている。すなわち、

天台大師のいはく、「もろもろの経論、処々にただ衆生を勧めてひとへに阿弥陀仏を念じ、西方の極楽世界を

求めしめたまへり。『無量寿経』・『観経』・『往生論』等の数十余部の経論の文に、慇懃に指授して西方に生ずることを勧めたり。ここをもつてひとへに念ず」と。（『真聖全』一・七七四―七七五頁、『七祖註釈版』八八七頁）

当時『往生要集』は南都北嶺に流布していたため、法然は自己の立場を自他共許の源信によって、その教学の歴史は妥当性を主張している。『浄土初学抄』に『往生要集』極楽証拠門にある天台大師智顗の『十疑論』について言及している。『十疑論』には念仏往生の文のみで諸行往生の文は入っていない。往生極楽を願うものは、天台宗の人でも『十疑論』によって念仏の法門を学ぶべきである。これは法然の私意でなく恵心の御意であると述べている。（『漢語灯録』一〇、『真聖全』四・五一五頁参照）

（二）対内的態度には二つ考えられる。（1）一往の勧化と（2）再往の勧化である。（1）一往の勧化は、一般門侶に対して浄土教の入門書として『往生要集』を依用する『十七条法語』に、

余宗の人浄土門にその志しあらむには、先ず『往生要集』をもて、これをおしふべし。そのゆへは、この書はものにこゝろえて、難なきやうにその面をみえて、初心の人のためによき也。

（『西方指南抄』巻中本、『真聖全』四・一三六頁）

という文からも、そのことが察せられる。

（2）再往の勧化は対者の学解の存在を前提とする。四部の『往生要集』の注釈書や『選択集』を依用する。その中に（a）差別門的立場と（b）一致門的立場が考えられる。（a）差別門的立場は、

善導は色相等の観法おば、観仏三昧と云り。称名念仏おば、念仏三昧と云り。恵心は称名・観法合して念仏三昧と云り。

（『同』、『真聖全』四・一三五―一三六頁）

と、善導と源信の教学的立場の相違を述べる。法然は偏依善導一師を強調し、『往生要集』は第二次的な助念法の

位となる。(b)一致門的立場とは、同じく『十七条法語』に、

然れども真実の底の本意は、称名念仏をもて、専修専念を勧進したまへり。善導と一同なり。(同一三六頁)

と述べ、『往生要集』助念方法門総結要行の「往生之業、念仏為本」は但念仏となり、『選択集』総標の文として、選択本願念仏を示す。『往生要集』を弘願要例の開顕として善導と同じとする。したがって念仏観として、源信の『往生要集』の念仏→善導の『往生礼讃』の百即百生の易行念仏→『観経疏』の本願念仏→法然の『選択集』の選択本願へと展開するのである。

法然は『往生要集釈』等の注釈書を著して、『往生要集』の要義を明示した。これを通して法然は龍樹・天親の教学、そして道綽・善導の教学に接し、特に善導の著述に関心を深め、選択本願念仏を中心とする浄土教の確立を行った。したがって源信の『往生要集』は日本浄土教の先駆者を成したものと言ってよいと思われる。

三、親鸞聖人と『往生要集』

親鸞聖人の主著『教行信証』をはじめ、『高僧和讃』や和語の聖教において、源信の『往生要集』が直接・間接引用されている。親鸞は比叡山の横川の常行堂において修学していたとみられる。『恵信尼文書』には、

この文ぞ、殿の比叡の山に堂僧つとめておはしましけるが、山を出でて、六角堂に百日籠らせたまひて、

(『真聖全』五・一〇六頁、『註釈版』八一四頁)

とあり、また『親鸞伝絵』上巻第一段に、

しばしば南岳・天台の玄風を訪ひて、ひろく三観仏乗の理を達し、とこしなへに楞厳横川の余流を湛へて、ふかく四教円融の義にあきらかなり。

(『真聖全』三・六三九頁、『註釈版』一〇四三―一〇四四頁)

と述べる文から明らかである。したがって親鸞が横川において天台教学や源信の著述である『往生要集』から大きな影響を受けていたとみられる。

まず『教行信証』における『往生要集』の引文から述べていきたい。『教行信証』には行巻・信巻・化身土巻（本）に引かれている。

（一）行巻大行釈第一文（『真聖全』二・三一―三二頁、『註釈版』一八四頁）

『往生要集』にいはく、「『双巻経』の三輩の業、浅深ありといへども、しかるに通じてみな〈一向専念無量寿仏〉といへり。三つに四十八願のなかに、念仏門において別して一つの願を発してのたまはく、〈乃至十念若不生者　不取正覚〉と。四つに『観経』には〈極重の悪人他の方便なし。ただ弥陀を称して極楽に生ずることを得〉」と。（『真聖全』一・八八二頁、『七祖註釈版』一・一〇九八頁）

この文は『往生要集』大文第八念仏証拠の第二文から第四文までである。『大経』下巻に三輩往生の「一向専念無量寿仏」、『大経』上巻・第十八願文の「乃至十念」、『観経』下々品の「称南無阿弥陀仏」に称名念仏が説かれる。

（二）行巻大行釈第二文（『真聖全』二・三二頁、『註釈版』一八四頁）

またいはく、「『心地観経』の六種の功徳によるべし。一つには無上大功徳田、二つには無上大恩徳、三つには無足・二足および多足衆生のなかの尊なり。四つにはきはめて値遇しがたきこと、優曇華のごとし。五つには独り三千大千界に出でたまふ。六つには世・出世間の功徳円満せり。義つぶさにかくのごときらの六種の功徳による。つねによく一切衆生を利益したまふ」と。（『真聖全』一・七八〇―七八一頁、『七祖註釈版』八九八頁）

『往生要集』大文第四正修念仏、第一礼拝門にある『心地観経』は六種の功徳を述べ、礼拝の対象である阿弥陀

仏の利益を示している。

(三)行巻大行釈第三文(『真聖全』二・三二頁、『註釈版』一八四―一八五頁)

この六種の功徳によりて信和尚のいはく、「一つには念ずべし、一称南無仏皆已成仏道のゆゑに、われ無上功徳田を帰命し礼したてまつる。二つには念ずべし、慈眼をもつて衆生を視そなはすこと、平等にして一子のごとし。ゆゑにわれ極大慈悲母を帰命し礼したてまつる。三つには念ずべし、十方の諸大士、弥陀尊を恭敬したてまつるがゆゑに、われ無上両足尊を帰命し礼したてまつる。四つには念ずべし、一たび仏名を聞くことを得ること、優曇華よりも過ぎたり。ゆゑにわれ極難値遇者を帰命し礼したてまつる。五つには念ずべし、一百倶胝界には二尊並んで出でたまはず。ゆゑにわれ希有大法王を帰命し礼したてまつる。六つには念ずべし、仏法衆徳海は三世同じく一体なり。ゆゑにわれ円融万徳尊を帰命し礼したてまつる」と。

(『真聖全』一・七八一頁、『七祖註釈版』八九八―八九九頁)

初めの「この六種の功徳によりて信和尚のいはく」の文は、親鸞の文であり、その後、前の第二文に続く『往生要集』の文が引かれている。前文と同じく六度にわたって阿弥陀仏への帰命・礼拝が述べられている。

(四)行巻大行釈第四文(『真聖全』二・三二頁、『註釈版』一八五頁)

またいはく、「波利質多樹の華、一日衣に薫ずるに、瞻蔔華・波師迦華、千歳薫ずといへども、及ぶことあたはざるところなり」と。

(『真聖全』一・七九二頁、『七祖註釈版』九二二頁)

この文は『往生要集』巻上末の大文第四正修念仏、第三作願門の第二利益に示されている。忉利天の善見城にあ

る波利質多樹の華（香遍樹）は、一日衣に薫じつけると、瞻蔔華（金色華）・波師迦華（雨時華）を千年薫じつけても、その香りは及ばないように、念仏の功徳はあらゆる功徳にすぐれていると述べる。もとは『華厳経』入法界品（晋訳五九）に述べられている。（『大正蔵』九・七七八頁b）そこでは波利質多樹の華を菩提心の華として喩えられている。

（五）行巻大行釈第五文（『真聖全』二・三二頁、『註釈版』一八五頁）

またいはく、「一斤の石汁、よく千斤の銅を変じて金となす。雪山に草あり、名づけて忍辱とす。牛もし食すればすなはち醍醐を得。尸（月）利沙鼻星を見ればすなはち菓実を出すがごとし」と。

（『真聖全』一・九〇六頁、『七祖註釈版』一一四三頁）

この文は『往生要集』巻下末、大文第十問答料簡の五臨終念相にある。『安楽集』の七喩を引いた後に、源信自ら九喩を加えて念仏がすぐれていることを述べている。源信は第一喩から第四喩までは「滅罪譬」、第五喩から第八喩までを「生善譬」、第九喩を「惣譬」としているが、親鸞はその中、第三の石汁・第五の雪山の草、第八の尸利沙の三喩を選んで大行釈の引いている。

（六）信巻大信釈第一文（『真聖全』二・五八頁、『註釈版』二二八―二二九頁）

『往生要集』にいはく、「〈入法界品〉にのたまはく、〈たとへば人ありて不可壊の薬を得れば、一切の怨敵その便りを得ざるがごとし。菩薩摩訶薩もまたまたかくのごとし。菩提心不可壊の法薬を得れば、一切の煩悩、諸魔怨敵、壊することあたはざるところなり。たとへば人ありて住水宝珠を得て、その身に瓔珞とすれば、深

き水中に入りて没溺せざるがごとし。菩提心の住水宝珠を得れば、生死海に入りて沈没せず。たとへば金剛は百千劫において水中に処して爛壊し、また異変なきがごとし。菩提の心もまたまたかくのごとし。無量劫において生死のなか、もろもろの煩悩の業に処するに、断滅することあたはず、また損滅なし〉」と。

（『真聖全』一・七九一―七九二頁、『七祖註釈版』九二一頁）

この文は『往生要集』巻上末の大文第四正修念仏、第三作願門の第二利益にある。『華厳経』入法界品（『大正蔵』）にある菩提心を不可壊薬に喩えているが、親鸞はこれを大信心の利益として述べている。

（七）信巻大信釈第二文（『真聖全』二・五八頁、『註釈版』二二九頁）

またいはく、「われまたかの摂取のなかにあれども、煩悩、眼を障へて見たてまつるにあたはずといへども、大悲、倦きことなくして、つねにわが身を照らしたまふ」と。

（『真聖全』一・八〇九頁、『七祖註釈版』九五六―九五七頁）

この文は『往生要集』巻中本、大文第四正修念仏、第四観察の第三雑略観にある『観経』正宗分第九真身観の文。「一々の光明は、あまねく十方世界を照らし、念仏の衆生を摂取して捨てたまはず」（『真聖全』一・五七頁、『註釈版』一〇二頁）を引き、続けて「われまたかの摂取のなかにあれども、煩悩、眼を障へて、見たてまつることあたはずといへども、大悲倦むことなくして、つねにわが身を照らしたまふ」（『真聖全』一・八〇九頁、『七祖註釈版』九五六―九五七頁）と述べられている。

（八）化身土巻（本）要文釈（『真聖全』二・一四六―一四七頁、『註釈版』三八〇―三八一頁）

首楞厳院の『要集』に、感禅師の釈を引きていはく、「問ふ。『菩薩処胎経』の第二に説かく、〈西方この閻浮提を去ること十二億那由他に懈慢界あり。乃至　意を発せる衆生、阿弥陀仏国に生ぜんと欲ふもの、みな深く懈慢国土に着して、前進んで阿弥陀仏国に生ずることあたはず。億千万の衆、時に一人ありて、よく阿弥陀仏国に生ず〉と云々。この『経』をもつて准難するに、生ずることを得べしやと。答ふ。『群疑論』に善導和尚の前の文を引きて、この難を釈して、またみづから助成していはく、〈この『経』の下の文にいはく、《なにをもつてのゆゑに、みな懈慢によりて執心牢固ならず》と。ここに知んぬ、雑修のものは執心不牢の人とす。ゆゑに懈慢国に生ず。もし雑修せずして、もつぱらこの業を行ぜば、これすなはち執心牢固にして、さだめて極楽国に生ぜん。乃至　また報の浄土に生ずるものはきはめて少なし。化の浄土のなかに生ずるものは少なからず。ゆゑに経の別説、実に相違せざるなり〉」と。

（『真聖全』一・八九八頁、『七祖註釈版』一一二六―一一二七頁）

この文は、『往生要集』大文第十問答料簡の往生階位にある。しかしこれは源信の文でなく、懐感の『群疑論』にある『菩薩処胎経』第二（現行の経では第三）に述べる問答である。問いは、阿弥陀仏国への願生者が懈慢界に執着して、進んで浄土に往生できないと説かれている。この経から浄土への往生は不可能ではないかを問う。答えとして『群疑論』には善導の前の文である『往生礼讃』「もしよく上のごとく念々相続して命を畢ふるを期となすものは、十はすなはち十生じ、百はすなはち百生ず。もし専を捨てて雑業を修せんと欲するものは、百にして時に希に一二を得、千にして時に希に三五を得と」（『真聖全』一・八九七―八九八頁、『七祖註釈版』一一二六頁）を引き、続いてこの難に対する自らの解釈を述べている。この『菩薩処胎経』の次の文に「なぜかというと、懈怠憍慢によって信心が堅固でないからである」と説かれている。これによって雑修のものは執心不牢の人で懈慢国に生じ、専

修のものは執心牢固で必ず極楽国に生まれる。また報土に生まれるものはとても少なく、化土に生ずるものは多い。したがって『菩薩処胎経』と『観経』とは全く相違しないと述べる。

この引文の直後に、親鸞はすでに行巻大行釈第一文に述べた「第十八願は別願中の別願」、『観経』の「極重悪人はただ弥陀の名を称えよ」と勧められている。したがって五濁悪世の出家者も在家者も、自らの能力を考えよと述べている。

（九）化身土巻（末）外教釈（『真聖全』二・二〇一頁、『註釈版』四七一頁）

『止観』によりていはく、「魔は煩悩によりて菩提を妨ぐるなり。鬼は病悪を起し命根を奪ふ」と。

『往生要集』には、この文がない。第五助念方法の第六対治魔事の「種々の魔事よく正道を障ふ。あるいは病患を発さしめ」の文（『真聖全』一・八四五頁、『七祖註釈版』一〇二七頁）の取意とする説もあるが、『摩訶止観』の意によって述べられたと考えられる。

次に「正信念仏偈」と「念仏正信偈」のそれぞれ八句について述べる。

（一）行巻「正信念仏偈」八句（『真聖全』二・四五―四六頁、『註釈版』二〇六―二〇七頁）

源信広開一代教　偏帰安養勧一切　専雑執心判浅深　報化二土正弁立
極重悪人唯称仏　我亦在彼摂取中　煩悩障眼雖不見　大悲無倦常照我
源信広く一代の教を開きて、ひとへに安養に帰して一切を勧む。
専雑の執心、浅深を判じて、報化二土まさしく弁立せり。

極重の悪人はただ仏を称すべし。われまたかの摂取のなかにあれども、煩悩、眼を障へて見たてまつらずといへども、大悲、倦きことなくしてつねにわれを照らしたまふといへり。

最初の二句は、源信が釈尊の教えを広く学ばれ、ただひたすら安養浄土を願い、すべての人々に勧められると述べられている。第三・四句は化身土巻（本）要門釈で述べた『群疑論』引用の『菩薩処胎経』に関する文で、諸行による自力の信心は浅く化土しか往生できないが、念仏による他力の信心は深く、報土への往生ができると明らかに示されている。第五句は行巻大行釈第一文で引かれた『観経』に極重悪人はただ称名念仏によってのみ往生できると述べられている。第六・七・八句は信巻大信釈第二文に我も阿弥陀仏の光明の中に摂取されているが、煩悩によって見ることはできないが、大悲は常に照らしてくださると述べられている。

（二）『浄土文類聚鈔』「念仏正信偈」八句（『真聖全』二・四五〇頁、『註釈版』四八八頁）

源信広開一代教　偏帰安養勧一切　依諸経論撰教行　誠是為濁世目足
決判得失於専雑　廻入念仏真実門　唯定浅深於執心　報化二土正弁立

源信広く一代の教を開きて、ひとへに安養に帰して一切を勧む。
諸経論によりて教行を撰びたまふ。まことにこれ濁世の目足たり。
得失を専雑に決判して、念仏の真実門に回入せしむ。
ただ浅深を執心に定めて、報化二土まさしく弁立せりと。

最初の二句と最後の一句は行巻の「正信念仏偈」と同文である。第三・四句の「諸経論によりて教行を撰びたまふ。まことにこれ濁世の目足たり」は往生極楽の教行は五濁悪世の目と足になるという『往生要集』の序文と内容

が同じである。後半の第五・六・七・八句は「正信念仏偈」の第三・四句と同じ内容であり、専雑の得失、執心の浅深、報化の二土の違いを明示して、念仏の真実の教えに入らしめられたと述べられる。

続いて、『高僧和讃』の源信讃十首をみてみよう。（『真聖全』二・五一一―五一二頁、『註釈版』五九三―五九五頁）

（一）源信和尚ののたまはく　われこれ故仏とあらはれて
　化縁すでにつきぬれば　本土にかへるとしめしけり

元来仏であったが、衆生済度のためにこの世にあらわれ、化縁が尽きたので、浄土に還られたと示されている。この伝承は『源信僧都行実』に「一日僧都身を雲間に現じて慶祐に告げて曰く。我は本極楽久住の大士なり。化縁已に尽きて本国に還帰す」（『恵心僧都全集』五・六八五頁）の文を和讃化されたものである。源信の滅後、三井寺の慶祐に不思議なお告げがあったという。すなわち源信を阿弥陀仏の化身と見ておられる。

（二）本師源信ねんごろに　一代仏教のそのなかに
　念仏一門ひらきてぞ　濁世末代をしへける

『往生要集』序文にある「往生極楽の教行は、濁世末代の目足なり」や「念仏の一門によりて、いささか経論の要文を集む」の文による。

（三）霊山聴衆とおはしける　源信僧都のをしへには
　報化二土ををしへてぞ　専雑の得失さだめたる

源信が三井寺の慶祐に告げたという古伝によれば、源信はインドの霊鷲山で釈尊の説法を聞いた人々の中におられた。その釈尊の一代仏教を伝承して、源信は報化二土・専雑得失をさだめられたと述べる。

（四）本師源信和尚は　懐感禅師の釈により
　『処胎経』をひらきてぞ　懈慢界をばあらはせる

大文第十問答料簡の第二往生階位の問の部分である。源信は懐感の『群疑論』によって『菩薩処胎経』の懈慢界を表されたのである。

（五）専修のひとをほむるには　千無一失とをしへたり
　雑修のひとをきらふには　万不一生とのべたまふ
（六）報の浄土の往生は　おほからずとぞあらはせる
　化土にうまるる衆生をば　すくなからずとをしへたり

（五）と（六）の和讃は往生階位の答の内容である。善導の『往生礼讃』の文を承けて『群疑論』の文を展開されている。専修の人は執心牢固、雑修の人は執心不牢固で、報土往生・化土往生の得失を述べている。（六）の和讃にあたる文の前に、『往生礼讃』では「乃至」と省略されている。その文は「余の一切の諸願諸行を廃し、西方一行を唯願唯行す。雑修の者は万に一も生ぜず。専修の人は千に一も失無し」（『大正蔵』四七・五〇頁c、『国訳一切経』四八・七三頁）である。この省略部分を親鸞は（五）の和讃で述べたのである。

（七）男女貴賤ことごとく　弥陀の名号称するに
　行住座臥もえらばれず　時処諸縁もさはりなし

大文第八念仏証拠の第一問答の答に、「いま念仏を勧むることは、これ余の種々の妙行を遮するにはあらず。ただこれ、男女・貴賤、行住坐臥を簡ばず、時処諸縁を論ぜずして、これを修するに難からず」（『真聖全』一・八八一頁、『七祖註釈版』一〇九六頁）と述べる文による。親鸞は原文にない「弥陀の名号称するに」を付け加えている。

（八）煩悩にまなこさへられて　摂取の光明みざれども
　大悲ものうきことなくて　つねにわが身をてらすなり
この文は「信巻」大信釈第二文や「正信念仏偈」の六・七・八句と同じ内容である。
（九）弥陀の報土をねがふひと　外儀のすがたはことなりと
　本願名号信受して　寤寐にわするることなかれ
大文第四正修念仏、第四観察門の三雑略観の極略観のところで述べた三想一心の称名を承けて、「外儀は異なりといへども、心念はつねに存ぜよ。念々に相続して、寤寐に忘るることなかれ」（『真聖全』一・八〇九頁、『七祖註釈版』九五七―九五八頁）という文によっている。親鸞は「本願名号信受して」の文を付け加えている。
（十）極悪深重の衆生は　他の方便さらになし
　ひとへに弥陀を称してぞ　浄土にうまるとのべたまふ
「正信念仏偈」にも述べられた、行巻大行釈第一文引用の『観経』「極重の悪人他の方便なし。ただ弥陀を称して極楽に生ずることを得」の文を和讃にされたものである。

次にその他の著述における『往生要集』の引用文をみてみよう。
（一）『浄土三経往生文類』（広本）（『真聖全』二・五五六―五五七頁、『註釈版』六三四―六三五頁）
大経往生・観経往生・弥陀経往生の三往生に関する諸文が引かれている。化身土巻（本）要門釈と同文を引いて『観経』の双樹林下往生の証文として述べている。『浄土三経往生文類』（略本）（『真聖全』二・五四七―五四八頁）も同文である。

（二）『尊号真像銘文』（広本）（『真聖全』二・五九三頁、『註釈版』六六二―六六三頁）

行巻大行釈の第一文と同じ念仏証拠門第四の『観経』の文を引いて「『首楞厳院源信和尚の銘文』我亦在彼摂取之中　煩悩障眼　雖不能見　大悲無倦　常照我身」を解説されている。『尊号真像銘文』（略本）（『真聖全』二・五七〇―五七一頁）も同様に解説されている。

（三）『一念多念文意』（『真聖全』二・六一〇頁、『註釈版』六八四頁）

前の『尊号真像銘文』と同文である。

（四）『末灯鈔』第二通（『真聖全』二・六五九頁、『註釈版』七四七頁）

念仏証拠門の問一の文『高僧和讃』第七文とほぼ同じであるが、親鸞は「本願の念仏を信楽するありさまをあらはせるには」の文を上に付け加えて、『往生要集』の「行住座臥を簡ばず、時処諸縁をきらはず」の文を引いている。

（五）『弥陀如来名号徳』（『真聖全』二・七三三頁、『註釈版』七二七頁）

十二光の最初の無量光を解説するために、『観経』第九真身観の光明摂取の文に続いて、観念門の総相観の文「まさに知るべし。一々の相のなかに、おのおの七百五倶胝六百万の光明を具して、熾然赫奕として神徳巍々たること、金山王の大海のなかにあるがごとし」（『真聖全』一・八〇七頁、『七祖註釈版』九五三頁）から引いている。

おわりに

以上、親鸞の著述・思想に対する源信教学の影響を考察してきた。主著『教行信証』には『往生要集』の正引が行巻に五例、信巻（本）二例、化身土巻（本）に一例と、八例みられる。また「正信念仏偈」・「念仏正信偈」各八

句ずつ、『高僧和讃』の中に源信讃十首、さらに『三経往生文類』（略本・広本）、『尊号真像銘文』（略本・広本）、『末灯鈔』、『弥陀如来名号徳』等を述べてきた。

その他、常陸称名寺伝で真蹟といわれる『往生要集云』（『真聖全』五・六六―六七頁）がある。これは大文第十問答料簡の第八信毀（しんき）の因縁前半にある文を和訳して書写したものである。[11]（『真聖全』一・九一六―九一七頁、『七祖註釈版』一一六三―一一六四頁）親鸞が漢文を読めないものに延べ書きしたものであろうと思われる。また東本願寺で発見された真蹟といわれる「二尊大悲本懐（経釈要文）」がある。[12]これは全文を六段に分け、恵心・覚運の文釈や『大経』発起序全文を記す。その第一段に「恵心院源信和尚曰」として、『往生要集』序文の冒頭から「易覚易行已上」まで引き、「又云」として「我亦在彼」等の二十四字を引いて「已上略出」と述べている。（『親鸞聖人全集』第六巻写伝篇(2)、二〇四―二一〇頁、解説二六四―二六六頁）

その他、源信の教学については、一乗思想・願海真仮論・仏性論等があるが、今後の課題としたい。

註

（1）『首楞厳院二十五三昧結縁過去帳』（比叡山専修院・同叡山学院著『恵心僧都全集』一・六七七―六七八頁、思文閣、昭和三年六月発行、昭和四十六年六月復刻）
『慧心院源信僧都行実』（『恵心僧都全集』五・六七〇―六七二頁）

（2）藤井智海著『往生要集の文化史的研究』五〇頁、平楽寺書店、昭和五三年七月

（3）花山信勝氏「『往生要集』諸本の研究」（『龍谷学報』三一七・一三九―一四〇頁、昭和一一年一一月）
北畠典生著『往生要集綱要』一三頁、永田文昌堂、平成四年七月

（4）『首楞厳院二十五三昧結縁過去帳』（『恵心僧都全集』一・六八〇頁）、北畠典生著『往生要集綱要』一四頁

（5）北畠典生著『往生要集綱要』一七頁および九―二一頁、永田文昌堂、平成四年七月

（6）普賢晃壽著『日本浄土教思想史研究』一四五頁、永田文昌堂、昭和四七年四月
（7）石井教道・大橋俊雄編『昭和新修法然上人全集』序文・五―七頁、平楽寺書店、昭和三〇年三月
（8）大橋俊雄校注『日本思想体系一〇　法然・一遍の解説』四五一頁、岩波書店、昭和四六年一月
（9）福原隆善稿　佐藤哲英著『叡山浄土教の研究』五〇六―五〇七頁、百華苑、昭和五四年三月
（10）赤松俊秀著『続鎌倉仏教の研究』二一九頁（10）
（11）梅原眞隆著「往生要集云」（『真宗講座』第六巻『親鸞聖人小部集』二三七―二四二頁、国書刊行会、昭和五二年七月
（12）福原亮厳著『二尊大悲本懐の研究』参照。永田文昌堂、昭和四三年一一月

《参考文献》

著書
・八木昊恵著『恵心教学の基礎的研究』永田文昌堂、昭和三七年一月
・普賢晃壽著『日本浄土教思想史研究』永田文昌堂、昭和四七年四月
・北畠典生著『往生要集綱要』永田文昌堂、平成四年七月
論文
・高千穂徹乗氏「法然上人と往生要集」（『龍谷学報』第三一七号、昭和一一年一一月）
・坪井俊映氏「法然上人における一向専修の形成について（Ⅰ）―往生要集釈と無量寿経釈を中心として―」（『東洋文化論集』福井康順博士頌壽記念会刊、昭和四四年一二月）
・坪井俊映氏「法然における『往生要集』の受容と展開―特に『浄土三部経釈』『選択集』を中心として―」（『往生要集研究』永田文昌堂、昭和六二年八月
・淺田正博氏「親鸞聖人の『往生要集』観」（『往生要集研究』永田文昌堂、昭和六二年八月）